

# 六朝時代における『大智度論』の研究講説

佐藤心岳

道安、慧勇、法朗、明舜および智顛が伝えられている。

## 二

東魏北齊の首都鄴（河南省）において『大智度論』の研究講説に關係のあつた人物としては、靈裕と洪遵が挙げられる。

靈裕は俗姓を趙といい、定州曲陽（河北省曲陽県）の人で、北魏の神龜元年（五一八）に生まれ、隋の大業元年（六〇五）に八十八歳で歿した。かれは十五歳で出家して、二十歳のときに東魏の首都鄴（河南省臨漳県）へ出て、そこで三年間にわたつて仏典の講説を聞き、一旦かれの故郷の定州へ歸つたが、また漳滏（河北省南部地方）に遊び、隱律師について『四分律』を学んだ。のち、かれはふたたび北齊の鄴都へおもむいて、仏典の研究講説に従事した。

ところで、靈裕は数多くの仏典の注釈書を著わすとともに『大智度論』の注釈書を著わしたが、それはいつごろどこで著わされたのであろうか。かれは三十歳になつてから著述を

中国の仏教が多数の漢訳仏典に基づいて著しい発展を遂げたことは周知の事実であるが、しかし、それらの漢訳仏典が、中国においては実際に、いつ、いかなる地域に伝えられて、研究され講説されて、人びとの思想信仰を育んだかということになる、その実情はかならずしも明確ではない。それで、ここでは、諸大乘経論のうちでも、古来、大乘仏教を理解するための必読の書として尊重されてきた『大智度論』を取り上げて、六朝時代における『大智度論』の研究講説の実情について検討を加えてみようとおもう。

六朝時代における『大智度論』の研究講説は、主として鄴、晋陽、青州、長安および建康を中心とした地域においておこなわれたと考えられる。そうして、この時代においてこの『大智度論』の研究講説に従事した人物としては、靈裕、洪遵、弁寂、智梵、法彦、志念、宝襲、彦琮、道宗、曇遂、

はじめたと伝えられている。かれは西暦五一八年に生まれ、<sup>②</sup>から、かれが三十歳のときはちようど西暦五四七年に相当する。それで、かれが『大智度論』の注釈書を著したのは少なくともそれ以後のことであつたと考えなければならぬ。それはまたちようど東魏北斉時代に相当する。かれが滞在したころの東魏北斉の鄴都においては『大智度論』の研究講説がひじょうに盛んであつたから、かれがその時期にそこでその注釈書を著わしたことはまちがいないとおもわれる。

洪邁は俗姓を時氏といい、相州（河南省臨漳県）の人で、北魏の建明元年（五三〇）に生まれ、隋の大業四年（六〇八）に七十九歳で歿した。かれは八歳で出家して、もつぱら律部を學んだ。かれははじめ嵩高山（河南省登封県北）の少林寺に住し、雲公に依資して『華嚴經』や『大智度論』などの講説を聞いた。<sup>③</sup>また、かれは『四分律』を學ぶために北斉の鄴都へ行つたが、それでも、かれは『阿毘曇論』や『大智度論』の講説を聞いたという。これによつて、東魏北斉時代に嵩高山や鄴都において『大智度論』の講説がおこなわれていたことが知られる。

北斉の鄴都において『大智度論』の研究講説に従事した人物としては、弁寂、智梵、法彦、志念および宝襲が伝えられている。

弁寂は徐州（江蘇省銅山県）の人で、明確な生存年時は不明

であるが、北斉から隋代へかけての人である。かれは若いころ各地を遊歴して、北斉の鄴都においてはもつぱら『大智度論』と『阿毘曇論』を研究して、一年間ではぼそれらを理解することができるようになつたという。このように、北斉の鄴都において『大智度論』の研究講説が盛んにおこなわれていた実情の一端がうかがわれる。

智梵は俗姓を封氏といい、渤海条（河北省河間県）の人で、東魏の興和元年（五三九）に生まれ、隋の大業九年（六一三）に七十五歳で歿した。かれは十二歳のときに河間郡（河北省河間県）へ行つて、靈簡禪師に師事したが、その後、北斉の鄴都へ出て、そこで『十地經論』や『大智度論』の研究をおこなつた。

法彦は俗姓を張といい、洛州（河北省永平県）に寓居し、隋の大業三年（六〇七）に六十余歳で歿した。かれは早歳にして出家して、仏教の興隆に志した。かれは經・律・論の三藏の奥義をきわめ、とくに『大智度論』に精通していた。かれは「ひとえに『大論』をもつて美を馳せ、法会に遊渉するに、あえて抗言するものなし」と伝えられ、また「ゆえに斉周および隋、京国通懼して、皆その神爽英拔を畏るるなり」と伝えられているから、かれは北斉、北周および隋時代を通じて『大智度論』の研究講説に従事していたことが明らかである。

志念は俗姓を陳氏といい、冀州信都（河北省冀県）の人で、東魏の天平二年（五三五）に生まれ、隋の大業四年（六〇八）に七十四歳で歿した。かれは二十歳のころ北齊の鄴都へ出て、道長法師について数年間にわたつて仏典の講説を聞いた。当時、道長法師は鄴都において『大智度論』に精通した学者として名を知られていたから、かれがこの間に道長法師から『大智度論』の思想的影響を受けたことはいうまでもない。その後、志念は故郷の冀州へ帰つて、十余年間にわたつて頻りに『雑心論』と『大智度論』を弘めたと伝えられている。それで、かれによつてこの地方の人びとにその思想的影響が顕著に及んだことは疑いないが、それは少なくとも北齊時代のことであつたと考えられる。

宝襲は貝州（河北省清河県）の人で、東魏の武定五年（五四七）に生まれ、唐の武徳の末年（六二六）に八十歳で歿した。かれは十八歳で仏教に帰依して、もつぱら經典の誦誦に従事した。のち、かれは諸大乘經論の講説を聞いたが、なかでも『大智度論』を最も尊重したと伝えられている。ところで、かれがこの『大智度論』の講説をどこで聞いたかということとは不明であるが、それはおそらく北齊の鄴都においてであつたと考えられる。

### 三

北齊時代の晋陽（山西省）において『大智度論』の研究講説に關係のあつた人物としては、彦琮が挙げられる。

彦琮は俗姓を李氏といい、趙郡栢人（河北省堯山県）の人で、北齊の天保八年（五五七）に生まれ、隋の大業六年（六一〇）に五十四歳で歿した。かれは十四歳のときに晋陽（山西省太原県）へ行つて、仏典の研究講説に従事したが、そこで、高名な人びとの要請によつてとくに『大智度論』の講説をおこなつたと伝えられている。これによつて、当時、『大智度論』が晋陽地方の一般の人びとによつていかに高く評価されていたかということがよくわかる。

ところで、彦琮は晋陽においていつごろ『大智度論』の講説をおこなつたのであろうか。かれは十四歳のときに晋陽へ行き、二十一歳のときにはすでに長安へ出ていたから、かれが晋陽において『大智度論』を講説したのは、かれが十四歳から二十一歳にいたるまで、すなわち西暦五七〇年から五七七年にいたるまでの期間のいずれかの時期においてであつたと考えられる。

北齊時代の青州（山東省）において『大智度論』の研究講説に従事した人物としては、道宗が伝えられている。

道宗は俗姓を孫氏といい、萊州即墨（山東省平度県）の人で、北齊の河清二年（五六三）に生まれ、唐の武徳六年（六二二）に六十一歳で歿した。かれは少くして青州（山東省臨淄県）

の道蔵寺の道契法師に師事して、『地持』『成実』『毘曇』などの諸経論とともに『大智度論』の研究をおこなった。のちかれは自分の建てた青州の遊徳寺に住して仏教の宣布につとめた。また、かれは青州地方において『大智度論』の講説に従事していたことが知られるが、それは北齊時代の終わりごろのことであつたと考えられる。

西魏北周時代の長安（陝西省）において『大智度論』の研究講説に関係のあつた人物としては、曇遂と道安が挙げられる。

曇遂は雍州（陝西省長安県）の人で、隋代末に八十余歳で歿したという。かれははじめに『大智度論』を学び、のちに『唯識』を味わい、ついで『撰論』を研精したと伝えられているが、かれが『大智度論』の研究に従事したのはいつごろどこにおいてであつたのであろうか。かれは隋代末に八十余歳で歿したといわれ、またとくにはじめに『大智度論』を學んだと伝えられているので、もしもその研究がかれの二十歳から三十歳ごろにかけてのことであつたとするならば、それは西魏北周時代のことであつたことになる。そうして、かれはその生涯の大部分を首都長安で過ごしたから、かれがその間にそこで『大智度論』の研究に従事したことはまちがいないとおもわれる。

道安は俗姓を姚といい、憑翊胡城（陝西省大荔県）の人で、

正確な生存年時は不明であるが、西魏北周時代に生存していたと考えられる。かれは早くより法門に附し、二十歳以後には『涅槃経』を尊崇し、また『大智度論』を徹底的に研究して、それに基づいて教えを説いたといわれている。かれは長安の大陟帖寺に住して、もつぱら伝道教化につとめたが、のち、勅命によつて大中興寺に住した。

このように、道安は『大智度論』の研究講説をおこなつたことが知られるが、それはいつごろどこにおいておこなわれたのであろうか。かれは「博く『智論』に通じて、用つて弘道の基を資く」といわれ、また「大陟帖寺に住し、常に弘法を以つて任となし、京師の士子、咸、清塵に附す」と伝えられているから、かれが長安において『大智度論』の研究講説に従事したことは疑いない。そうして、陟帖寺は西魏の大統五年（五三九）に建てられたから、かれがそこで『大智度論』の研究講説をおこなつたのは、少なくとも西暦五三九年以後、すなわち西魏北周時代のことであつたと考えられる。

#### 四

梁陳の首都建康（南京）において『大智度論』の研究講説に従事した人物としては、慧勇が伝えられている。

慧勇は俗姓を桓氏といい、その祖先は譙国竜亢（安徽省懷遠県）の人で、のち呉郡呉県（江蘇省呉県）に寓居した。かれ

は梁の天監十四年(五一五)に生まれ、陳の至徳元年(五八三)に六十九歳で歿した。かれははじめ首都建康へ出て、雲曜寺の則法師に依止し、二十歳のときには静衆寺の峰律師について『十誦律』を学んだ。当時、竜光寺の僧綽と建元寺の法龍とともに建康仏教界において名を成していたが、慧勇はかれらについて『成実論』の研鑽につとめた。

陳の天嘉五年(五六四)に、慧勇は文帝に招かれて、太極殿において仏典の講説をおこなった。その講説には多数の人びとが集まり、このとき以来、かれはひじょうに有名になつたという。かれは首都建康の仏教界において諸大乘経論とともに『大智度論』の講説を三十五回おこなつたと伝えられているが、かれはこの『大智度論』の講説をいつごろおこなつたのであろうか。かれは三十歳になると盛んに仏典の講説をおこなつたという。そうして、かれが三十歳のときはちやうど梁の大同十年、すなわち西暦五四四年に相当するから、かれが諸大乘経論とともに『大智度論』の講説をおこなつたのは、それ以後のことである。それで、かれが首都建康において『大智度論』を講説したのは、少なくとも西暦五四四年からかれが亡くなつた西暦五八三年にいたるまでの約三十九年間のいずれかの時期においてであつたと考えられる。ともかく、かれがこの三十九年間に首都建康において『大智度論』の講説をおこなつて、人びとの思想信仰に大きな影響を与え

たことは疑いない。

陳の首都建康およびその周辺の地域において『大智度論』の研究講説に関係のあつた人物としては、法朗、明舜および智顛が挙げられる。

法朗は俗姓を周氏といい、徐州沛郡沛(江蘇省沛県)の人で、北魏の景明四年(五〇七)に生まれ、陳の太建十三年(五八二)に七十五歳で歿した。かれは二十一歳のときに青州(山東省臨淄県)において仏道にはいり、揚都に遊学し、諸師について仏典の講説を聞いた。のち、かれは摂山の止観寺の僧詮法師について『華嚴』『大品』『中』『百』『十二門』などの諸経論とともに『大智度論』を学んだ。そうして、かれは陳の永定二年(五五八)に勅命によつて都へ出て、興皇寺に住して盛んに仏典の講説をおこなつた。かれはそこで二十五年間にわたつて諸経論や『大智度論』の講説をそれぞれ二十余遍おこなつたと伝えられている。これによつて、陳の首都建康において『大智度論』の講説がいかに盛んにおこなわれていたかという事実の一端がよくうかがわれる。

明舜は俗姓を張といい、青州(山東省臨淄県)の人で、東魏の武定五年(五四七)に生まれ、隋の大業二年(六〇六)に六十歳で歿した。かれは少くして仏教を学び、とくに『大智度論』の研究によつて著名であつた。かれの伝記の記述によると、かれは夢のなかで冥官の質問に対して『大智度論』の講

説をおこなつた<sup>(2)</sup>と答えたということが伝えられているが、これは、とりもなおさず、かれが『大智度論』の研究講説にきわめて熱心であつたという事実の一面をよく物語つていっているといわなければならない。

ところで、明舜は『大智度論』の研究講説をいつごろどこでおこなつたのであろうか。かれはその生涯を通じて諸大乘経論のうちでもとくに『大智度論』にきわめて深い関心をもつていたので、かれは六朝時代にはかれが滞在した青州や建業においてこの『大智度論』の研究講説をおこなつたことはまちがいないと考えられる。

智顛は俗姓を陳氏といい、荊州華容（湖南省華容県）の人で、梁の大同四年（五三八）に生まれ、隋の開皇十七年（五九七）に六十歳で歿した。かれは梁の承聖三年（五五四）に戦乱に遭遇して出家の志をおこし、十八歳のときに湘州（湖南省長沙県）の果願寺の法緒について出家した。かれはまた慧曠について律蔵を学び、のち太賢山にはいつて『法華経』『無量義経』『普賢観経』などを説誦して、陳の天嘉元年（五六〇）には光州の大蘇山（河南省商城県東南）にはいつて、慧思禅師の指導を受けて開悟したといわれている。

のち、智顛は三十一歳のころ陳の都金陵（南京）へ出て瓦官寺に住し、そこで八年間にわたつて『法華経題』などを講説して弟子たちを指導したが、そののち、かれはそこでまた

つねに『大智度論』の講説をおこなつた<sup>(2)</sup>と伝えられている。

陳の太建七年（五七五）に、かれは天台山（浙江省天台県北）にはいつて、九年間にわたつて仏道の修行にはげんだ。至徳三年（五八五）に、かれは陳の後主の命を受けて、天台山を出て金陵の靈曜寺に住し、同年四月には太極殿において『大智度論』の講説をおこなつた<sup>(2)</sup>。そうして、かれはかれが遊歴した地域において『大智度論』の講説をおこなつたと伝えられているから、かれによつてそれらの地域の人びとに『大智度論』の思想的影響が及んだことはまちがいない。

陳代の江南地方（江蘇省）において『大智度論』の研究講説に従事した人物としては、慧覚が伝えられている。

慧覚は俗姓を孫氏といい、その祖先は太原晋陽（山西省太原県）の人で、江西の戦乱のときに丹陽の秣陵（江蘇省江寧県）へ移住した。かれは北斉の天保五年（五五四）に生まれ、隋の大業二年（六〇六）に五十三歳で歿した。かれは八歳で出家して、建康の興皇寺の法朗法師に師事した。その後、かれは攝山を訪れて栖霞寺に止まつて、仏典の研究講説に従事したが、当時の江南地方においては『大智度論』の研究講説はあまり盛んではなかつた。ところが、この地方において『大智度論』の研究講説が勃興するようになったのは、慧覚の努力によつてであつた<sup>(2)</sup>という。そうして、それは陳代のことであつたが、この時代に江南地方においてとくに『大智度論』の

研究講説が盛んになつたということは注目すべきことである。

## 五

以上に検討した結果から明らかなように、『大智度論』は、六朝時代においては、河南省の北端に位する鄴、山西省のほぼ中部に位する晋陽、山東省の北部に位する青州、陝西省のやや南部に位する長安および江蘇省の西南部に位する建康を中心とした地域において研究され講説されて、これらの地域の人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼした。そうして、これらの地域のうちで、六朝時代を通じて『大智度論』の研究講説が最も盛んにおこなわれたのは、東魏北齊の首都鄴においてであつたと考えられる。この時代の鄴には、ほぼ四千を数える仏寺が櫛比して、講席は二百以上もあつて、これらの講席で聴講する人びとはつねに一万人を越えていた(『統高僧伝』卷十、靖崇伝、大正蔵、五〇卷、五〇一頁中)と伝えられている。このように隆盛をきわめる鄴都の仏教界において『大智度論』の研究講説は盛んにおこなわれたのであつた。

1 成実、毘曇、智論、各抄五卷(『統高僧伝』卷九、靈裕伝、大正蔵、五〇卷、四九七頁下)。

2 自年三十、既存著述(『統高僧伝』卷九、靈裕伝、大正蔵、五〇卷、四九七頁下)。

六朝時代における『大智度論』の研究講説(佐藤)

3 初住嵩高、少林寺、依雲曇公、開胸律要、并及華嚴、大論、前後參聽、並扣其闕戸、渙然大明(『統高僧伝』卷二十一、洪遵伝、大正蔵、五〇卷、六一一頁中)。

4 以戒律旁義、有舍他部者、乃重聽、大論、毘曇、開沃津奧(『統高僧伝』卷二十一、洪遵伝、大正蔵、五〇卷、六一一頁中)。

5 末在齊都、專攻大論、及阿毘曇心、未越周年、粗得通解(『統高僧伝』卷二十六、弁寂伝、大正蔵、五〇卷、六七五頁上)。

6 遂遊學鄴都、師承大論、十地等文、並嘗味弘旨、溫習真性、俊響遐逸、同侶婦宗(『統高僧伝』卷十一、智梵伝、大正蔵、五〇卷、五一一頁中)。

7 雖三藏並通、偏以大論、馳美、遊涉法會、莫敢抗言(『統高僧伝』卷十、法彦伝、大正蔵、五〇卷、五〇五頁中)。

8 故齊周及隋、京國通懼、皆畏、其神爽英拔也(『統高僧伝』卷十、法彦伝、大正蔵、五〇卷、五〇五頁中)。

9 爰至受具、問道鄴都、有道長法師、精通智論、為學者之宗(『統高僧伝』卷十一、志念伝、大正蔵、五〇卷、五〇八頁中)。

10 類弘二論、一十余年(『統高僧伝』卷十一、志念伝、大正蔵、五〇卷、五〇八頁下)。

11 後聽經論、偏以智度、為宗(『統高僧伝』卷十二、寶襲伝、大正蔵、五〇卷、五二〇頁上中)。

12 齊武平之初、年十有四、西入晋陽、且講且聽、當爾、道張汾朝、名布道儒、尚書敬長瑜、及朝秀、盧思道、元行恭、邢恕等、並高齊榮望、欽揖風猷、同為建齋、講大智論、親受披導、

歎所未聞(『統高僧伝』卷二、彦殊伝、大正蔵、五〇卷、四三六頁中)。

13 宗、受業智論、十地、地持、成実、毘曇、大小該博(『統高僧伝』卷十一、道宗伝、大正蔵、五〇卷、五一二頁上)。

14 及講大論、天雨衆花、施邊講堂、飛流戸内(『統高僧伝』卷十一、道宗伝、大正蔵、五〇卷、五一二頁上)。

15 初学大論、後味唯識、研精撰論、選其幽理(『統高僧伝』卷二十六、曇遂伝、大正蔵、五〇卷、六七二頁中)。

16 進具已後、崇尚涅槃、以為遺訣之教、博通智論、用資弘道之基(『統高僧伝』卷二十三、道安伝、大正蔵、五〇卷、六二八頁上)。

17 住大陟峭寺、常以弘法為任、京師士子、咸附清塵(『統高僧伝』卷二十三、道安伝、大正蔵、五〇卷、六二八頁)。

18 講花嚴、涅槃、方等、大集、小品、各二十遍、智論、中、百、十二門論、各三十五遍(『統高僧伝』卷七、慧勇伝、大正蔵、五〇卷、四七八頁中下)。

19 至年三十、法輪便転、自此遠致学徒、盛開講肆(『統高僧伝』卷七、慧勇伝、大正蔵、五〇卷、四七八頁中)。

20 於此山、止觀寺、僧詮法師、演說智度、中、百、十二門論、並花嚴、小品等經、於即、弥綸藏部、探蹟幽微(『統高僧伝』卷七、法朗伝、大正蔵、五〇卷、四七七頁中)。

21 永定二年十一月、奉勅入京、住興皇寺、鎮講相統(『統高僧伝』卷七、法朗伝、大正蔵、五〇卷、四七七頁中)。

22 開前經論、各二十余遍、二十五載、流潤不絶(『統高僧伝』卷七、法朗伝、大正蔵、五〇卷、四七七頁中下)。

23 偏以智論、著名、次第誦文、六十余卷、明統大旨、馳譽海浜、解患連環、世称雄傑(『統高僧伝』卷十一、明舜伝、大正蔵、五〇卷、五一〇頁下)。

24 經入夢、具見冥官、徵責福業、舜答、講智度論、并誦本文、六十余卷(『統高僧伝』卷十一、明舜伝、大正蔵、五〇卷、五一頁上)。

25 顛禪師、於瓦官寺、為儀同沈君現等、講法華經、後常与衆講大智度論、說次第禪門(『仏祖統紀』卷三十七、大正蔵、四九卷、三五二頁下)。

26 四月、在靈曜寺、宣口勅、護国之力、莫過敷演、仰屈、於大極殿、開大智度論題(『国清百録』卷一、大正蔵、四六卷、七九九頁下)。三年、詔顛禪師、入京、居靈曜寺、四月、赴大極殿、講大智度論題、般若經題(『仏祖統紀』卷三十七、大正蔵、四九卷、三五三頁中)。四月詔、赴大極殿、開大智度論題、及

仁王般若經題(『仏祖統紀』卷六、大正蔵、四九卷、一八二頁下)。迎入、大極殿之東堂、講智論(『統高僧伝』卷十七、智顛伝、大正蔵、五〇卷、五六五頁下)。

27 綿歴八周、講智度論、肅諸来学(『統高僧伝』卷十七、智顛伝、大正蔵、五〇卷、五六四頁下)。

28 以大智度論、江左少弘、布備宗緒、将陳請説、乃垂覃思、申暢幽微、布公、披襟歎美、即命開講、於是、旧文新意、両以通之、遠近餐服、聞所未聞、釈論広興、於斯盛矣(『統高僧伝』卷十二、慧覺伝、大正蔵、五〇卷、五一六頁上)。

(昭和四十七年度文部省科学研究費による研究成果の一部)